

# 令和7年度 全国学力・学習状況調査の結果

令和7年 9月29日  
京都市立深草小学校  
校長 土井 則夫

令和7年4月17日に、本校6年生を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」について、結果がまとまりました。本調査は、国語・算数・理科の3教科のテストと同時に、家庭での過ごし方や学習時間を問う調査も実施されており、生活習慣と学力の関係など、本校の子どもたちの状況をお伝えします。

## 総合結果

国語、算数、理科の3教科ともに、全国平均をわずかに上回る結果となりました。

どの領域も、ほぼ平均値を示していましたが、「記述式」での回答では、正答率が全国平均を下回る教科・領域がありました。また、「記述式」の回答では、無回答率が全国平均を上回っており、児童質問紙調査からも「記述問題」に関しては、国語科では約25%、算数科では約35%、理科では、約27%の児童が「解答しなかったり、書くことをあきらめたりしたものがあった」と回答しています。

このことから、自分の考えを文章や言葉、図や式などを使って説明することへの難しさや抵抗感があることがわかります。

記述するための土台となる知識の積み重ねと、学習に向かう意欲づけや効果的な課題の提示の仕方などを工夫することで、自分の思いや考えを表現したいと思える授業づくりを目指し、生き生きと自分の思いを表現できる子どもが増えていくよう、引き続き、日々の授業実践を進めていきたいと思います。

## 国語科より

正答率は、全国平均をわずかですが上回っています。

「読むこと」の分野で、正答率が低くなる傾向がありました。例年のことですが、問題内に使われる資料の情報量は多く、その中から正しく答えるために必要な情報をうまく読み取り、活用していかなければなりません。しかし、情報量が多いため、思考・判断するための情報をうまく拾い集め、整理することができずに誤答してしまっているように感じます。

正確に読み取るためにも、低学年のうちから、主述の関係を押えたり、順序・場面の移り変わりなどを押えたりする活動を丁寧に繰り返し、必要な情報を選ぶための読解力を育てていくことが今後の課題です。

## 算数科より

「思考・判断・表現」の観点で、正答率が低くなる傾向があります。特に、目的に応じた適切なグラフを選択して説明する問題では、正答率が約30%でした。提示されたグラフのどこに着目して、どの数値が必要か判断する力を問われる問題でしたが、国語科と同様に、たくさんの情報の中から、必要な情報を選び出すことができず、説明不足で誤答になっている児童が多かったです。

領域別では、「数と計算」の分数の問題において、正答率が30%を下回る問題がありました。分数の加法・減法に必要な通分の概念を問う問題ですが、無回答率も高く、問い自体の意味を理解できず、誤答につながっているようにも感じます。

公式に当てはめるなどの基本的な計算技能は身につけてきていますが、小数や分数の基本的な概念を説明できる力を身につけていく必要があると感じました。

## 理科より

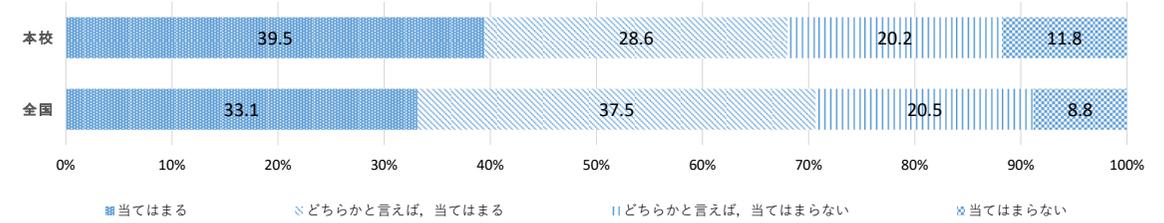
ヘチマの発芽の条件などを問う「生命」の領域では、全国平均を大きく上回っていました。実際にヘチマを育てながら観察し、考えたことで、強く印象に残っていたのかもしれません。

一方で、「電気の性質」を問われる問題で、身の回りの金属について、「電気を通すか」「磁石に引き付けられるか」を問う問題や、回路のつなぎ方を問う問題、電磁石の磁力を強くする方法を問う問題など、基本的な知識・技能を問われた問題で、全国平均を下回っていました。実験を通して経験しているのですが、時間の経過とともに知識が薄れ、定着できていないことが考えられます。

理科においては、実際にやってみて、自分の目で見て、考えることが知識の定着にもつながってくるので、できる限り実験・観察の時間を確保し、自然事象についての理解を深めていけるように工夫していきたいです。

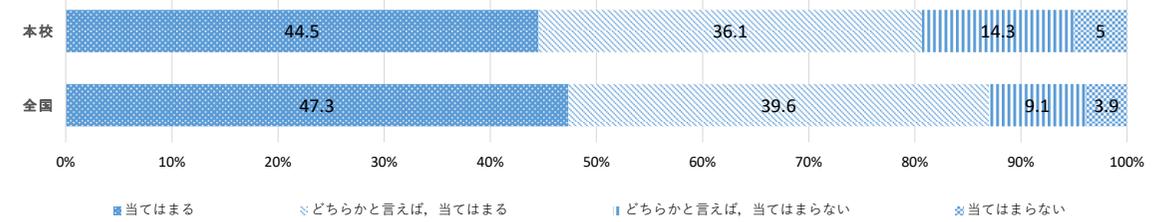
## 児童質問紙調査から

### Q. 困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか？



チーム担任制となって2年目。子どもたちは、いろいろな教職員と関わる中で、相談できる存在を見つけ、困りや不安を話せていることは嬉しいことです。一方で、誰に話せばよいのかわからない、声をかけるのが苦手だという児童が一定数いることは重く受け止めなければいけません。誰にも言えずに困りを抱えている児童を見逃さないように、たくさんの教職員の目で、しっかりとアンテナを張って見守ってまいります。また、各ご家庭とも連携をとって、お子さんが安心して通える学校にしていきたいです。

### Q. 自分にはよいところがあると思いますか？



全国平均と比べ、「当てはまる」と回答した児童の割合がやや下回っています。自分のことを否定し、自信がもてないことで、学習意欲の低下や友だち関係が消極的になりやすいことなどが考えられます。学校においては、学習面や生活面での一人一人のよさをしっかりと認め、自己肯定感を高めていくことで、なりたい自分に少しでも近づいていけるように支援していきたいと考えています。どうしても「できていないこと」が気になりますが、ご家庭でも、子どもたちのよさを見つけ、伝えることで、何事にも前向きに取り組める環境づくりにご協力いただければと思います。

## 全体を通した本校の成果と課題

本校では、「互いを認め合い すすんで学び続ける子どもの育成」という学校教育目標のもと、保護者や地域の皆様の協力を得て、教職員一丸となって取組をすすめています。

日々の授業の様子を見てみると、どの学年も課題に対して前向きに取り組む姿が多く見られます。児童質問紙調査でも、80%近くの児童が、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいると回答しています。しかし、「記述式」の説明を求められる問題の正答率が低いことから、授業時には「できた」と思っているにもかかわらず、しっかりと理解して「わかった」には至っていないことが考えられます。自分の言葉で説明できる（言語化できる）ように、課題解決の過程の中で、課題に対し、自ら考え、グループや学級で話し合いながら試行錯誤を繰り返しつつ、課題の解決にせまっていくような授業を進めていけるように、授業改善に努めていきたいと思います。

## 保護者の皆様へ

全国調査は、子どもたちの学習状況を知り、子どもたちの可能性をさらに伸ばしたり、課題を解決したりしていくためのものです。結果が学力の全てを表しているのではなく、順位を競うものでもありません。学校・家庭・地域での地道な積み重ねにより学力は定着していくものです。引き続き、子どもたちの健やかな育ちと学びの環境づくりにご協力をお願いいたします。